

P-141

摂食障害児童の在宅移行と母の診療介入が回復を促した一例:親子のこころの診療の重要性

石井 隆大

久留米大学医学部小児科学講座

【背景】摂食障害児の診療では、診療ガイドラインが策定され、外来・入院治療の明確な基準が定められている。しかし、入院治療が奏功しない場合、在宅移行が有効なことがある。加えて、児童の治療のみならず、親の精神的健康への介入が児童の回復に寄与するとの報告もある。今回、症例を通じて、母子の診療と親の精神疾患のケアが児童の摂食障害治療に与える影響について検討した。**【目的・方法】**摂食障害を呈した小学校5年生の女子の症例を振り返り、入院治療の限界と在宅治療への移行、母の診療介入が児童の回復に与えた影響を考察する。入院経過、在宅移行、母の精神科診療導入の影響を検討した。**【症例】**患者は小学校5年生の女子。極度の食事減少と強迫的な運動行動により体重減少を呈し、前医で入院加療を受けたが軽快は得られず、当院に転院した。初回入院では経管栄養と行動療法で軽快するも、退院後再燃し再入院。経管栄養再導入と母子分離を実施も、自傷行為出現や学校問題が発覚し、治療方針を見直した。患児も含めた話し合いの末、治療の場を病院から自宅へ移行し、訪問看護による経管栄養管理を段階的に実施した。加えて、児童の発達特性や学校でのいじめ、不適応の事実を共有し、学校環境の調整や合理的配慮の整備を行った。同時に、母の精神科受診を積極的に勧め、当院精神科で加療を開始し、母の精神的負担を軽減することを試みた。その結果、経鼻胃管を離脱し、経口摂取が回復。自傷行為後に無気力・緘黙状態であった児童は、外来で簡単な受け答えが可能となり、登校が可能となった。**【考察】**本症例では、入院治療が奏功せず、在宅移行となつたが、母の診療介入と環境調整が児童の回復に寄与した。摂食障害の治療において、児童個人の症状のみならず、家族の心理的状態や親子の相互関係が回復に影響を及ぼすことが示唆された。親の治療が進むことで親子関係が改善し、児童の症状も軽減した可能性がある。背景を見極めた上で、児童だけでなく、親子の包括的診療が重要と考えられる。**【結論】**症例を通して、母の精神疾患のケアが児童の回復に寄与したことを見た。親子のこころの診療を包括的に行なうことが、摂食障害の治療において有効なアプローチとなる可能性があり、今後の治療戦略において重要な視点となる。

P-142

低ホスファターゼ症:子の診断を契機に親の診断にいたった2家系

上岡 由奈¹⁾、田嶋 華子^{1,2)}、松本 多絵³⁾、
根本(山本) 晴子⁴⁾、右田 真²⁾¹⁾日本医科大学付属病院 小児科、²⁾日本医科大学武蔵小杉病院 小児科、³⁾日本医科大学多摩永山病院 小児科、⁴⁾日本大学松戸歯学部 小児歯科学講座

【背景】乳歯は一般的に6歳頃から生えかわりが始まる。乳歯早期脱落とは通常の時期より早期に乳歯が脱落する状態であり、その代表的な疾患として低ホスファターゼ症 (HPP) が知られている。HPPはALPL遺伝子の病的バリエントにより組織非特異的アルカリホスファターゼの機能が失われ、低アルカリホスファターゼ (ALP) 血症、骨石灰化障害、および歯のセメント質形成不全などを引き起こす疾患である。比較的軽症とされる小児型および歯限局型では、歯根の吸収を伴わない乳歯早期脱落が初発症状として現れることが多い。今回、乳歯早期脱落を主訴として受診しHPPと診断した小児例において、後にその親もHPPと診断した2家系を経験した。**【症例】**症例1は4歳女児。4歳で乳歯早期脱落を認めたため、精査加療目的で歯科より紹介となった。父は軽微な運動で下肢痛が出て長引く傾向がある。また健診のたびにALP低値を指摘されていた。母は健診でALP正常である。症例2は3歳男児。2歳で乳歯早期脱落を認めたため、精査加療目的で歯科より紹介となった。父は2回の骨折歴および異所性石灰化を認め、運動時に骨痛が出やすい。約20年前からALP低値を指摘されている。症例1、2ともに血清ALP低値および尿中PEA高値を認めたため、HPPを疑いALPL遺伝子解析を施行した。その結果、両症例とも既報の病的バリエントを認めHPPと診断した。このことからそれぞれの父親もHPPが強く疑われた。症例1の父は児と同じバリエントを認め、症例2の父は遺伝子検査を検討中である。**【考察】**乳歯早期脱落はHPPの診断の契機となることが多いため、乳歯早期脱落症例ではHPPを鑑別に挙げ、医科・歯科の連携を密にすることが重要である。また、本症は遺伝性疾患であるが、同じ遺伝子型を有していても表現型が異なる場合や浸透率が低い可能性があるため、診断の際には詳細な家族歴の聴取が不可欠である。さらに、HPPでは骨代謝が一般的な骨粗鬆症とは異なりビスホスホネート薬が病態を悪化させる可能性があるため、治療方針を決定するうえで正確な診断が求められる。重症例に対しては酵素補充療法が有効であるが、現在遺伝子治療の開発も進められている。